

総 括

イサカ ノリコ
板坂 則子

第41回 国際日本文学研究集会は、両日共に晴れ、街が紅葉に美しく彩られる中で行われた。天候不順といわれ続けた今秋の中でのこのさいわいをまず喜び、本会の総括を始めたい。

11日の最初の発表者はイタリアから参加のカッポンチェッリ ルカ氏で、「朔太郎のセンチメンタリズムにおける「身体」の意味を考える」と題して、夏目漱石や田山花袋などを例に、萩原朔太郎以前には否定的な文脈で用いられていた「センチメンタリズム」という語が、朔太郎によって疾患する身体というイメージと結び付き、感情表出の手段として用いられるようになった過程を追い、朔太郎の身体感を浮かび上がらせた。次いで松本海氏の「中上健次『浄徳寺ツアー』における〈語り〉の試み」は、語り物を典拠として用いるところの多かった中上の作の中から『浄徳寺ツアー』を取り上げ、「語り物」の使い方を詳述し、そこから「語り」への関心の萌芽を読み取るが、重厚な中上作品の研究に相応しい丁寧な読みが示され、質疑応答では本作の位置について活発な議論が交わされた。「多文化的なテキスト：阿部和重の初期作品における「エクリチュール」をめぐって」を発表したロエマー マリア氏はドイツのハイデルベルグ大学博士課程に籍を置くが、発表では阿部和重のデビュー作である『アメリカの夜』を読み解いた。「語るべきものは何もない」とされていることを和重の「書き方」の問題として捉え、記号や漢字などテキストの細部に注目して分析し、阿部文学を国際性、多文化性の中で論じた。初日は、例年の進行

とは異なり、後述するがこの後に対談が行われたことから、発表は近現代文学を扱った上記の三本に留まった。

12日は変わって、古典籍を中心とした発表が並んだ。イタリア国立ナポリ東洋大学の研究員であるマニエーリ アントニオ氏は「古代日本における地理書～『和名類聚抄』所引『宜都山川記』をめぐって」と題して、平安中期の源順による辞書『和名類聚抄』に引用されている『宜都山川記』『宜都記』の記述を拾い、両書が同一書であること、『和名類聚抄』の記述が唐代類書からの孫引きであることを述べて、中国でも早くに失われた『宜都記』という書物の性格を推定した。張 硯君氏の「林宗和聞書抄『大学抄』の生成とその価値—講述聞書における校合の実態をめぐって—」は、学問の家である清原家の『大学』講義の中でも重要な清原宣賢の『大学抄』を巡って、林宗和による講義聞書記録とされてきた「林宗和聞書抄」の詳細な内容分析の結果を発表した。書写年代の最も古い『京都大学付属図書館・清家文庫蔵大学抄』を他書と対照し、宗和が独自に校合を加えた部分が少なからず見られることを指摘し、本書が宗和自身による積極的な注解を行っていることを導いたが、精細な分析から明解な結論を出し、中国から留学中の張氏の地道な研鑽の姿勢が忍ばれる発表である。次いで幾浦 裕之氏の「UCLA 梅尾コレクションの研究 覚城院旧蔵書の視点から」は、UCLA所蔵の故梅尾祥雲氏が蒐集された「梅尾コレクション」66点の書誌事項を中心とした報告である。蔵書印や書き入れなど、場合によっては見過ごされる書誌状況を見ることで、これら近隣の寺のものも含めた覚城院の書物から当時の仏教関係者の動きも想像され、書誌学の楽しみを伝える発表であった。以上が午前中の三本の発表で、次いでショートセッション（後述）を挟んで、午後にも力溢れる発表が並んだ。

陳 夢陽氏は中国から来日中の院生であるが、発表は江戸中期の上方歌舞伎を主導した並木正三に注目し、『三千世界商往来』他の作を取り上げ、当時、既に実力者であった中村新九郎やいまだ若手の中村歌右衛門といった役者との組合せから、実悪や女方といった役柄がどのように描かれたかを考察した。具

体的な指摘によって正三の作劇法と、当時の役者たちの力関係が分かり易く説かれた発表である。次いで名古屋大学准教授のミギー デイラン氏は、「貸本屋大惣の改装表紙から見る文化・文政・天保期間の合巻の仕入れ状況」と題して、研究中の貸本屋・大惣の合巻本についての書誌報告を行った。大惣こと大野屋惣八は江戸期から明治期まで長期間に亘って名古屋の中心地で店を開き、その規模は貸本屋の中で群を抜いていることで知られる。ミギー氏の発表は、今回の集会の中で最も効果的なパワーポイントの使い方をしていたように思う。すなわちテキスト中心ではなく、画像とアニメーション効果を駆使して、大惣という貸本屋の存在を印象づけた。発表では大惣の付けた替表紙を調査し、二十八年間のものについては替表紙の作成年が決定できることを紹介した。今回の発表は部分的な成果と思われ、今後の大惣本の研究成果が期待されよう。掉尾の発表は台湾元智大学准教授の廖 秀娟氏による「戦時下の小説にみる〈歌〉の役割—<12月8日小説群>を中心に—」で、1941年12月8日、太平洋戦争開戦の日を描く小説類から、そこに描かれた軍歌に照準を当てたもの。火野葦平『朝』、上林曉『歴史の日』には軍歌の記述が少なく、対して伊藤整『十二月八日の記録』、太宰治『十二月八日』には大きく描かれ、坂口安吾『真珠』では軍歌に対抗するものとして作者の鼻歌の登場などを指摘したが、質疑応答で「軍歌」とは何かという問が発せられた。時代を問題にする時、私たちの日常の意識の在り方そのものにも細心の注意が必要とならうか。

ショートセッションでは、同志社女子大学の博士課程に所属するハンガリーのカローイ オルショヤ氏が「男が詠む「待恋」—『百人一首』翻訳論」を、筑波大学研究科所属の金 美京氏は「蕉風俳諧における「恋句」の特色」と、「恋」に纏わる発表が揃った。前者は和歌の特性として男性が女性の立場で詠んだ「待恋」の歌として、百人一首から三首の翻訳をジェンダー的な視点から論じたが、会場からは「待恋」の歌とする基準そのものへの質問も出た。後者は芭蕉が一座したすべての俳諧を調査し、蕉風俳諧に於ける「恋句」を「恋之詞」に焦点を宛てて時代的な変遷を示したもので、これまでの定説への異義を

くっきりとした論証で提示した。

その他、ポスターセッションとして藤 夢激氏「大地としての生命力—三島由紀夫古典主義期の作品における「下層への働き」—」、大内 瑞恵氏「狂歌と彗星—『古今夷曲集』考」、江崎 公子氏「西周著「百学連関」にみる芸術理解について」、横山 恵理氏「法華寺蔵『七草絵巻』考—孝子譚の側面から—」と、幅広い発表が並んだ。中で横山氏は『七草絵巻』を『二十四孝』「大舜」譚との共通点から孝行譚として捉えて見せ、江崎氏は去年度に続いて「芸術」という言葉の発生を追求し、学問研究に掛ける厳しさと同時にそこから得られる喜びも聞く者に十分に示すものであった。

このように9本の研究発表、ショートセッションに2本、さらにポスターセッション4本と盛り沢山の集会であったが、発表者は若い研究者を中心として、国際の名にふさわしくアジアの諸国ならびに欧米のさまざまな国から迎えることができた。扱われた時代も平安期から現代まで、研究対象も韻文、散文、演劇、辞書、小説、書誌や書肆など、そして研究方法も述べてきたように実にさまざまである。これほど多様なテーマと研究手法による成果が一堂に会するのは、本集会ならではの特徴と言えよう。それぞれの発表者が研鑽を積み、多大な努力の上に生み出された日本文学に関わる研究成果を発表する姿に、胸を熱くした聴講者の方々も多かったのではないだろうか。これほどの多様性を見せる発表であるが、基本として共通するのは実証性を重んじていることであろう。精密な文献学的手法を土台に据えることが求められている。日本に於ける日本文学研究であるから、この実証性に求められる精度は並大抵のものではない。特に海外から日本に居を移して研究に勤しまれた方々の苦闘が忍ばれる。しかしながらよくいわれることであるが、日本そしてアジアと欧米圏での文学研究の間には、少なからぬ差異がある。日本で身に付けた文献学的に固められた堅固な結論を導く手法がテーマの重要性や論の展開を重要視する欧米圏では違和感を与え、そのために研究対象は同一であっても、帰国後に全く異なる二つの論文を書く必要性を感じる研究者も少なくないであろう。今

日の情報社会では、海外と日本国内の間に距離の隔たりによる差異を感じることは、年を追って減少している。メールやネットで情報をやり取りし、スカイプで直接顔を見ながら話し合う時など、むしろ海外の知人との間に距離感をまったく感じない場合も多い。もちろん日本語の習得は大変であるが、書物の画像や書誌情報が高い精度を持って公開されている現在では、研究の地理的条件は、場合によってはそれほどの障害とはならない時もある。「国際」と冠する本集会も、この地理的・言語的な問題を解決に導くため、英語による発表申込みの受付や、YouTubeによる発表のリアルタイム動画発信を行っている。今後は、海外からのインターネットを用いた研究発表も不可能ではなからう。対して研究姿勢の東西の差異に対してどう対応するかが、より大きく問われていくのではないだろうか。

日本という国に於ける日本文学における国際性とは何か。そのことに一つの明るい道を示してくれたのが、今回の特別企画である作家多和田 葉子氏とロバート キャンベル館長による対談であったと私は考える。多和田氏はドイツの大学院で学ばれ、ドイツ語と日本語双方を駆使した作品は両国で高い評価を得、現代日本とドイツ両国を代表する作家であり、本集会でも研究対象とされることが多い。キャンベル氏も又、日本語と英語を自在に用いた活躍で知られる。対談は、『『蛸、出て来い。』ついそちらへ歩いて行ってしまう人々の物語』と題し、キャンベル氏が『百年の散歩』『雲をつかむ話』『献灯使』といった多和田氏の近作を読み解き、多和田氏からはご自身の創作方法について語られた。現在の日本人にとって忘れてはならない東日本大震災後の世界など、日本を客観視するところから生まれる日本の在り方への深い思索は、聞く者を引きずり込まずに置かない濃密な言語の世界の魅力を堪能させるものであった。ディスカッサントとして河野 至恩委員が文学研究の「場」についての話題を導いて本集会の意義を改めて確認し、会場では活発な意見交換が行われた。この対談には、文学研究そのものにもあまり馴染みのない多くの方たちにも参加していただき、場内は熱気に溢れた。

第41回 国際日本文学研究集会は、日本文学研究の未来はどうあるのか、国際性とは何かなど、多く考えさせられる集会であったといえよう。日本文学研究という高い専門性を保持しつつ、広く開かれた集会をめざしていくための指針が見えてきた実り多い集会であったと思う。本会で発表された多くの若い研究者の方たちにとって、本会が日本研究を日本において行ったことの記念ではなく、今後の研究の確固たる土台となり、今後の本集会にも注目し続けていただきたいと、切に願って筆を止める。